

原爆による弟の死

東京都 竹内 美和子

父古坂建造が外地へ行ったのは大正八年頃。長野県の中学校を卒業して、勇躍渡満して旅順の工科大学に入学。卒業後、当時の通信省の電話関係の仕事に就いたと聞いています。

母古坂ふじこは、明治四十四年小学校四年の頃に渡満しました。祖母の八重が結婚一年目に夫に先立たれ、気丈な女性だったので一人娘ふじここと母親とみの生活を支えるため、満鉄にいた親戚を頼って三人で奉天まで行ったとのこと。ふじこは、奉天の小学校を大正五年に卒業してから大連の神明高女に入学。父と母が結婚したのは大正十一年です。

長女の私は大正十三年に大連で生まれましたが、父の勤めの関係で、生後一年ぐらいで鉄嶺という町に転勤。私が物心つく頃には、奉天の電話局に勤めていて、当時

官舎といわれたいわゆる公務員住宅に住んでいました。通信省に何年ぐらいいたのかわかりませんが、恩給がつくまでいたようですから十年以上は勤めていたと思います。

恩給がついてから辞めて、民間の満州電信電話(株)転職。奉天から大連に移り、さらに熱河省の承德電報電話局長、新京の電々本社、安東の電報電話局長、奉天電報電話局長等々を転々とし、その間、単身赴任が多かったようです。そのため、私は小学校は奉天から大連へ、女学校は旅順から新京へと転校し、そして昭和十五年から十八年まで東京の女子専門学校(現女子大)に進学しました。

今でも忘れられないできごとがあります。昭和十八年、父は上司との間に摩擦があって電々を辞め、満州の資産を整理して日本に帰ろうという気持ちになり、当時東京で学生生活の最後の年を送っていた私に、東京で職捜しをするようにと言ってきたのです。その頃戦局は悪化、そろそろ東京にも空襲が始まり、それに食糧事情もひっ迫してきていましたから、母と私とで父が内地に帰

るといふのを止めたのです。いまから思えばあれは父に何か予感があったのかも知れず、それを女の浅知慮でとめて、けっきょくはすべてを失う仕儀となったのを思い出すと、今でも胸が痛みます。

昭和二十年八月の敗戦後満州には新聞もラジオ報道もなくなり、内地の情報がほとんど入ってきませんでした。広島と長崎に得体の知れない威力を持つ爆弾が落とされたというのは聞かされましたが、二十年四月に、長崎の医科大学に入学していた弟の消息は翌年七月に引揚げてくるまでいっさいわかりませんでした。夏休みのことではあるし、多分長野県の上田にいる父方の祖父のところへ帰郷していたのではないか、引揚げたらきつと会えるといういちろの望みを托して、一か月近くにわたる引揚げの労苦に堪え、やっと親子四人、郷里の上田にたどりついたとき、初めて弟毅の死を知らされたのです。その時の両親の心の痛手を考えると、今でも涙を抑えることができません。

我家の敗戦の記憶

北海道 樋口良雄

昭和二十年五月十日四平専売署属官西安専売局勤務の私は、満州国の専売である石油類酒精などに特に揮発油に代わる代替燃料として酒精増産のため県内の醸造指定工場督励に廻り帰局すると県公署兵事係に至急連絡の板書を見た。まぎれもなく召集令状であった私は受領するとただちに妻に伝え、四平専売署副署長に報告併せて引継ぎのため職員の派遣と家族を四平市に引揚げる旨を連絡した。

妻は妊娠八か月の身で加えて長男は三歳の幼児のため満系職員のみ専売局に残すことは至難であったからである。引き継ぎも終り大半の荷物も取纏め起立して見送る職員を後に四平市を十四日に出発。副署長を始め先任職員に後事を依頼し夕刻の混雑する指定列車で翌五月十五日東安省平陽満州第一二八師団通信隊に無事入隊し